マルクス経済学の現代的課題

佐伯尚美／侘美光彦／石川経夫 編

東京大学出版会

マルクス経済学の現代的課題

佐伯尚美／侘美光彦／石川経夫 編

東京大学出版会

マルクス経済学の現代的課題〔東京大学産業経済研究叢書〕

1981年1月20日　初　版

[検印廃止]

編　者　佐伯尚美・侘美光彦・石川経夫©

発行所　財団法人　東京大学出版会

代表者　江村　稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1　東大構内
電話（811）8814・振替東京 6-59964

印刷所　株式会社三秀舎
製本所　誠製本株式会社

3033-43187-5149

はしがき

わが国においてマルクス経済学の研究がはじめられたのは戦前の一九二〇年代のことであるから、それから数えてすでに半世紀を越える長い研究の歴史をもつ。この間、マルクス経済学の研究は理論的にも、実証的にもいちじるしい深化を遂げ、数々の大きな成果をあげてきた。またその性格も、近代経済学とのきびしい緊張・対立のなかで数量的・技術論的アプローチに強く傾斜していった欧米諸国のマルクス経済学とも異なり、さらに体制護持のイデオロギーとして公式主義的・教条主義的性格を強めていった社会主義諸国のマルクス経済学とも異なる、特殊日本的とでもいうべき独自の学風を形成してきた。

だが、それと同時に、わが国のマルクス経済学が現在一つの大きな転換期にさしかかっていることも、まぎれもない事実であるように思われる。個別的にみれば、特定の細分化された領域・テーマについてすぐれた業績が生み出されていることは否定するわけではないが、総体としてマルクス経済学の方法的特徴である現実とのきびしい緊張関係、対象の全体的・構造的把握という性格が次第に失われつつあるようにみえるからである。マルクス経済学はそもそも何を、どのように取りあげるべきかという点について、一種の戸惑いにも似た雰囲気が研究者の間にただよっている。その点では、戦前を生成期、戦後を確立期とすれば、高度経済成長期以降のマルクス経済学は混迷期にあるといっていい。

こうした研究状況を規定したのは、何よりも対象である世界経済そのものの変化である。すなわち、一方では国家独占資本主義と呼ばれる先進国経済が六〇年代の高度成長を経過するなかでいちじるしく成熟経済

としての様相を強め、その内部における階級関係を不分明なものにしてきているし、同時に他方では社会主義経済もまたスターリン体制批判、中ソ対立などを通じてその内部的矛盾を拡大してきている。従来のマルクス経済学がその分析の暗黙の前提としてきた階級対立の激化→革命→社会主義社会の形成というシェーマが、必ずしもそのままの形では妥当しないような状況が生まれつつあるのである。

「マルクス経済学の現代的課題」と題するわれわれのコンファレンスは、以上のような研究状況をふまえ、改めてマルクス経済学の現実的有効性を虚心坦懐に問い直してみることを目的に計画された。マルクス経済学はこれまでどのような理論的蓄積を行ない、その研究はどのような水準に達しているのか、それは変貌しつつある資本主義の現実にどのように迫りうるのか、またそれは近代経済学とはどのように異なり、両者の間にどのような対立点ないし接点が存在するのか、さらにそれは社会主義経済をどのようにとらえ、どのように分析するのか。このような広範な問題にこたえるため、マルクス経済学の特定の学派に偏ることなく、近代経済学の研究者を含めた多様な人々に参加を乞い、率直に意見を交換してもらうこととしたのである。

三日間にわたる討議はきわめて真摯で、白熱したものであり、しばしば問題の大きさに比して時間の不足が痛感された。結果的には意見の一致点よりもむしろ相互の対立点のみが目立っているかのようにみえるが、これはこうした性格のコンファレンスとしては当然のことであり、われわれとしてはこれらの多面的な検討のなかから、マルクス経済学の今後の展開について多くの貴重な示唆がえられたのではないかと、ひそかに自負している。多忙な研究時間をさいて快くこのコンファレンスに参加して下さった方々に心から感謝したい。同時に紙幅の制限により、コンファレンスにおける発言の一部を割愛しなければならなかったことをお詫びしなければならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なお、このコンファレンスは東京大学経済学振興財団の援助により、昭和五四年度の研究プロジェクトとして行なわれた。これについて、財団ならびに関係各位にお礼申しあげる。さらに、この記録を本にまとめるにさいしては、東京大学出版会の大瀬令子さんにたいへんお世話になったことを記しておかなければならない。

一九五五年一一月

編集委員
佐伯尚美
侘美光彦
石川経夫

目次

はしがき　大内力　一

序　問題提起

I　研究の現段階

第一章　戦後日本の『資本論』研究と宇野理論　山口重克　二

討論……司会　伊藤誠　二元

コメント1……鶴田満彦　二九

コメント2……侘美光彦　三三

第二章　現代資本主義研究の動向　加藤栄一　三三

討論……司会　佐伯尚美　五五

コメント1……森田桐郎　五五

コメント2……馬場宏二　六六

II　批判と反批判

第三章　近代経済学からみた労働価値説　根岸　隆　一〇五
討　論……司会　高須賀義博　一三五
コメント1……浜田宏一　一三五
コメント2……杉浦克己　一三九
第四章　欧米マルクス学派による近代経済学批判　伊藤　誠　一四七
討　論……高須賀義博　一七一
コメント1……内田忠夫　一七一
コメント2……石川経夫　一七五

III　マルクシズムと社会主義

第五章　社会主義経済研究の動向　中山弘正　一九五
討　論……司会　岩田昌征　二一一
コメント1……大内　力　二一一

コメント2……二瓶剛男　二八
第六章　現代社会主義に関する一考察　岩田昌征　二三
討論……司会　柴垣和夫　二五九
コメント1……竹内啓　二五九
コメント2……新田俊三　二六四
コンファレンス参加者・日程一覧　二八五

序　問題提起

大内　力

一

最初にこのコンファレンス全体の趣旨説明をかねて問題提起をさせていただきます。東大経済学部付属産業経済研究施設では、一〇年ほど前より日本の土地問題、財政問題、経済学と現代、公共部門の争議権問題、日本経済、企業と社会などといった特定のテーマをきめて、これについて広く内外の専門家にご参加いただき、集中的に討議するという形で、コンファレンスをつづけてきました。その成果はすでに公刊されておりますので、ご承知の方も多いかと思いますが、今回の「マルクス経済学の現代的課題」も、その一環として計画されたものであります。その当時は私もまだ現役でご相談にあずかったのですが、たまたま今回の参加メンバーのなかでは私が最年長ということで趣旨説明をおおせつかったわけであります。

やや内輪話めいたことで恐縮ですが、この「マルクス経済学の現代的課題」という題目がどこで決まったのかというと、じつはどちらかというと、マルクス経済学者でない方々からの強い要望であったわけです。それではなぜこういう問題を今年出されたのかということを私なりに考えてみますと、一つには何といっても、現実の動きからのインパクトが大きいように思います。つまり、七〇年代に入りまして、資本主義が非

常に重大な転換期にさしかかってきているということが、一般にいわれるようになってきた。とくにその中でスタグフレーションという形が、かなりはっきりと世界的に現われ、それが理論的にも実践的にも大きな問題となってきております。

それとともに、こういう資本主義に生じつつある新しい現象にたいして、従来いわば政策指導的な立場に立っていた近代経済学、特にケインズ的な経済学ないしその上に立った経済政策が、いろいろないみで破綻を示しはじめたということも問題になってきている。その点をやや大げさにいう人たちからは、経済学の危機であるという指摘すらなされているわけであります。

こういうわけで近代経済学は、いわばそのレーゾン・デートルを問われている、あるいはそこまでいわないにしても、従来の理論的な枠組にたいして反省が迫られる状況にある。そこで、これにたいしていわば対照的立場にあるマルクス経済学は、一体現代の資本主義について、どういう認識をもち、またそこから発生しつつあるさまざまの問題にたいしてどういう答えを用意しているのか。こういうことがとうぜん問われることになった——というのが、おそらくこの問題を考えた人々の一つの問題意識でなかったかと思います。

ところで、われわれが今度はマルクス経済学の立場からこの問題提起をどのように受けとめるかを考えてみると、じつはマルクス経済学の方にも、いろいろな問題があるということに思いあたります。つまり、近代経済学が危機に陥ったから、マルクス経済学の方は万々歳だというわけにはいかないのでして、マルクス経済学にもマルクス経済学なりのあるいみにおける危機が、やはりあるといっていいのではないかと思います。もちろん、その危機の性質は、近代経済学のばあいとは多少違うわけでして、マルクス経済学には、近代経済学ほど資本主義にコミットするといった考え方はもともとない。むしろ、それを批判する立場に立っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ているわけでして、公式主義的ないし教条主義的ないい方をすれば、資本主義がゆきづまるのはあたりまえであり、矛盾が起ったり破綻が起ったりするのはわれわれからいえば予想されたことだ、こういって突き離せるのかもしれません。しかし、そういっただけでは問題はけっして片づかない。やはりマルクス経済学としても反省しなければならない問題が多々あるし、その点がきちんと正されないと、現代的課題にたいしてマルクス経済学なりに答えることもできないのではないかと思います。

二

その反省しなければならない問題点ですが、もちろん考えればたくさんあります。しかし、さしあたりわれわれがこの計画を立てるにさいして議論したときの問題意識としては、すくなくとも二つの点をまず明らかにしてかかる必要があるということでした。

その一つは、いわば理論的な枠組みの点です。あるいは、現状分析をするための理論的な道具としてのマルクス経済学をどのように考えるかという問題であります。従来、マルクス経済学は、ともすれば公式主義的であり、教条主義的であるということが、つねに非難されてきましたし、事実一部のマルクス経済学者あるいはマルクス主義経済学者は現在でもいぜんとして、『資本論』から出発して、マルクスのいったことをできるだけ忠実に辿ろうという態度をなかなか抜け切れないでいる。そのことがマルクス経済学は現状を説明するための理論としては、不生産的でありいわば石女であるという批判を招く結果となったということは否めないように思います。そこで現状を学問的に、あるいは理論的に把握するということが問題となるばあいには、どうしてもそういう把握のために、マルクス経済学はこれまでどれだけのことを用意してきたかをあ

らためてサーヴェイし、これまでのマルクス経済学の理論的な——理論というのは狭いいみの原理論だけでなくて、現状分析まで含めた理論ですが——発展が、どれだけの蓄積をもち、どういう方向に展開してきており、それをいまの転換しつつある資本主義の現実にアプライするとすれば、どこまで迫ることができるのか、という点を明らかにしてかかることが必要になると考えられます。

これについて私の理解では、たしかにマルクス経済学のかなりの部分が教条主義から抜け出せないという欠陥をもっていたことは率直に認めていいと思いますが、他面、とくに日本では、この戦後の三〇年の間にたんにそういうものでなくて、後につづきます山口重克君の報告の言葉を借りていえば、『資本論』を学ぶのではなくて『資本論』に学ぶという形で、『資本論』から出発しながら、原理論においても、段階論においても、さらには現状分析においても、理論を一層内容豊富なものにしていこうとする試みが、それなりにそうとう積み重ねられてきたといっていいだろうと思います。その点では、後ほど、欧米のマルクス経済学のご紹介もあるわけですが、私はかならずしもつまびらかにしておりませんが、おそらく日本のマルクス経済学の三〇年間の発展というのは、世界的にいっても先進的ないみをもっていたのではないかと考えております。

こういうわけで、このコンファレンスの第一部および第二部においては、戦後日本におけるマルクス経済学の研究、つまり『資本論』を原理論としておさえるところから出発して、現代資本主義論を経て、現状分析にいたるまでの理論構成について、戦後のマルクス経済学の研究が、どういう問題意識をもち、どこまで展開してきたかを、ひとつ洗ってみよう、それと同時に西欧諸国におけるマルクス経済学ともある程度比較し、また、近代経済学からのマルクス経済学にたいする注文なり批判なり——従来からそれはいろいろあったし、最近また装いを新たにして出されているわけですが——それにたいしても、どこまで答えうるかを検

討してみよう――コンファレンスの前半はこういう問題意識に立って計画されたわけであります。

三

つぎに、後半の部分は、第二の問題に関連します。すなわち、マルクス経済学として反省するというか、明らかにしなければならない第二の問題は、社会主義との関連についてであります。いうまでもなく、マルクス経済学は、経済学自体としてはかならずしも社会主義を直接主張しようと考えているとは限らない。もちろん、実際には経済学から直接社会主義を主張できると考えているマルクス経済学者もたくさんいるわけですが、しかしそうではなく、経済学としては資本主義の客観的な分析をすればいいのであって、社会主義の問題は、より実践的な問題だという考え方もありうるし、そういう考え方に立つマルクス経済学者も多数おります。私自身もその一人ですが、しかし、そうであるとしても、マルクス経済学は何らか将来社会についての展望をもつということが、その歴史科学としての性格上必然になるといっていいだろうと思います。

そこで一方で、いま資本主義がすでに転換期にきているとか、ゆきづまりにきているという認識をもつとすれば、他方、それから先、社会はいかなる歴史的展開をするかという問題意識をもたざるをえない。それがどこまで理論的に詰められるかということになれば、いろいろ議論がありましょうが、それにしてもある歴史的な展望をもたなければ、現在の資本主義についてその歴史的な位置をはっきりさせることもできない。そのいみではマルクス経済学における資本主義分析と、社会主義の問題とは、多かれ少なかれ裏腹の形で提起されるべき問題だといっていいかと思います。

ところで、その社会主義の問題ですが、じつはマルクス経済学が、先ほどいったようにあるいみではやは

り危機的な状態になっているということもこれと密接に関連しているのです。というのは、どうも現代の社会主義の現実そのものが、はなはだ厄介な存在になっており、これをどう理解し、どう位置づけるかとい問題をある程度でも明らかにしておかないと、マルクス経済学の問題意識に十分答えることができないということになっているのではないかと思われるからです。

そのことをもう少したち入っていうならば、マルクス以来、一般に社会主義というものは、資本主義の否定の上に成り立つものだと理解されてきました。そこで一方では、資本主義を正しく把握し、その中にある矛盾なり崩壊の必然性なりを明らかにすると同時に、その否定というのが何をいみするかを明確にすれば、それによって他方では社会主義についての一つの展望がもてると考えられてきたわけです。そしてある時期までは、現実の歴史は、まさにマルクスが予言したようになったのであって、ロシア革命以後の社会主義の発展によって、資本主義は否定されたと考えられてきた。むろんマルクスの考えたような社会主義が完成されたわけではないにしても、少なくともその方向に歴史が進展しつつあるという認識を、マルクス経済学者なりマルクス主義者なりは多かれ少なかれもっていたといっていいでしょう。しかし、後で報告がありますように、ここ一〇年か一五年ほどの間に、現代社会主義の現実についての研究がだんだん深められてくる中で、果してこれがマルクスの考えた社会主義であるのか、あるいは、別の面からいえば、これが正しく資本主義を否定したものとして位置づけることができる体制なのかどうかが、学問的にもさまざまな側面から疑問視されるようになってきたといっていいように思います。もちろん、これはたんに学問的に疑問視されるようになったというだけではなく、内外の社会主義の実践の中においても、多くの大衆によって、直感的にではあれ、同じような疑問がもたれるようになってきていると申せましょう。社会主義運動の目指すべき目

標が現代社会主義のような社会を作るということであるならば、それはかならずしも望ましいこととは考えられない、したがってそれが運動の指導理念になるとはいい切れないという一種の懐疑感あるいは挫折感が、日本だけでなく、先進資本主義諸国の社会主義運動の中に程度の差はあれ広汎に拡がってきているといっていいかと思います。

そこで理論的にいいましても、資本主義を正しく否定したいみにおける社会主義とはどういうものであり、それと現実に与えられている社会主義との間に、どれだけのずれがあるのか――いいかえれば現実はどこでいわばボタンをかけ違えたのか、すくなくともマルクスが予想したのと違った方向へ展開せざるをえない必然性がなぜ生じたのかという問題に、もう一度答えなければならないことになります。裏返していえば、正しく資本主義を否定した社会主義の理念というものは、どういうものが考えられるのかということを、ある程度でも明らかにすることによって歴史的展望を与える、ということがどうしてもマルクス経済学にとっては必要なのだろうということです。その点についてのある程度の見通しをもちえなければ、資本主義批判というマルクス経済学の本来の課題にも十分答えたことにならない。そこで、こういう現代的課題を明らかにするために、現代社会主義論あるいは現代社会主義分析を、現代資本主義分析と同時にやってみようということになったわけでして、後半に社会主義論のプログラムを組みましたのは、そういう意識に立ってのことであります。

当初にわれわれが考えた問題意識というのは、およそ以上のようなことでありますが、しかし、今日の大きな歴史的な転換にたいして、これだけでマルクス経済学なりに全部を答えたということにならないことは

もちろんであります。おそらくは解明のためのほんの手がかりを与えるという程度のことでありましょうが、しかしこれから三日間の討論の中で、いま申しましたような問題点がすこしでも煮つめられ、われわれの共通の理解が一歩でも前進すれば、このコンファレンスはたいへん有意義であったといえるのではないかと思います。以上、簡単ですが、問題提起といたします。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com